

中屋先生の薫陶－アメリカ科の思い出－

第5期（1957年卒業）児玉 佳與子(旧姓:齋藤)

東京大学入学当時、総長は、矢内原忠雄先生でした。先生のごことは、祖父母や父母などからよく聞いていました。第二次世界大戦中、平和主義の立場から、正義や非戦論を主張し、厳しく植民地主義的な戦争を批判されたため、東大を追われてしまわれたこととか、『嘉信』という雑誌を編集しながら、ご自宅で「土曜学校」を開いておられたことなど……。また先生は内村鑑三の門下で、戦後東大に復帰されてからは総長を務めながら、毎日曜、自由が丘のご自宅近くの今井館で聖書講義をしておられました。なんどか姉たちと一緒にその集会に参加させていただいたこともありました。そのようなこともあり、私は駒場になんとなく憧れを感じていましたし、また入学後はキャンパスにも、すぐ親しみを覚えるようになりました。

駒場では、前田陽一先生からフランス語を学び、フランスの歴史や文化を中心に学際的な話を、おもしろく聞きました。波乱に満ちた先生の戦争中のご体験も、少しお聞きしました。後で知ったこととつなぎ合わせると、先生はドイツ占領下のパリに留学しておられ、ドイツに逃れ、米軍に拘束され、アメリカで終戦を迎えられ、という、数奇な経験をされたとのこと。そのときのさまざまなご経験が、教養学部の設置理念にも反映されているとうかがい、教養学部で、とりわけ先生にお習いしたことを誇りに思っております。

また、前田護郎先生には、キリスト教思想史を学びながら、内村鑑三がもっていた信仰だけでなく、彼の幅広い教養についても学びました。前東大総長の南原繁先生のお話も、ときどきお聞きしました。祖父齋藤宗次郎は内村鑑三の弟子で、無教会の「洗足会」という集会を輪番制で、ときどき自宅の成宗の家で開いていましたが、そのような折、南原先生は、よくお見えになっておられました。そのころ先生が私に書いてくださった色紙は、今でも額に入れて我が家に飾っております。

いつの間にか私は、欧米のキリスト教的伝統とヘレニズム的伝統、とりわけアメリカでの展開、そしてその日本での受容について、深い関心を寄せるようになりました。そして教養学科のアメリカ科に進みました。

アメリカ科では、もっぱら当時の主任教授、中屋健一先生の薫陶を受けまし

た。南原先生や矢内原先生とは、まったく対照的な先生でした。

「雑巾と学生は絞れば絞るほどよい」

というのが先生の口癖でした。アメリカ文化史の授業では「マップ・スタディ」などで徹底的に絞られたものです。最近のカリキュラムの中に含まれているかどうか存じませんが、地図を中心にアメリカの自然や歴史や文化を学ぶにあたって、それを膨大な資料とともに学際的かつ総合的に検討してペーパーを書いたりテストを受けたりするのです。しかも一時間目の授業で、ベルが鳴り終わったとたんに教室に飛び込んでも、大声で

「遅刻！」

と厳しく言い渡されるのです。徹夜でしあげた宿題をかかえ、通学に長時間かけてやっと駆け上がったというのに、全くご配慮なし。社会人現代人国際人としての躰教育をびしっと受けました。

でも先生は、やさしい面もありました。先生には、南米の楽しい歌を教えてくださいました。

「アイ、アイ、アイアイ、

アイ、アイ、アイ、アイアイ、

ポノレケ・カンタンド(以下意味不明省略)」

冬になると学生を連れて、よくスキーに行かれました。先生は小樽のご出身でスキーがお上手、夜には人生教育もあり、学生たちは、それを「中屋スキー教室」と名づけ、喜んで参加していました。しかしとっても口の悪い先生でした。下手な滑りかたをしていると「ウンチング・スタイルだ」と批評されました。私は集団疎開中、真田(長野県)でスキーをしていたので、比較的うまかったのですが、合宿の折でしたか、順番で料理係をおおせつかったときなど、スキーや勉強で褒められないのに、お料理で褒められました。そのうえ

「お嫁にいけるぞ」

と保証してくださり、嬉しいながらも、少々がっかりしたものでした。ずっと後のこと、京都に移り住んでからのことになりますが、中屋先生は京都外国語大学で集中講義をなさっておられた時期があります。そのような折、我が家になんとかおいでいただいたことがありました。あるとき

「なんだ、すきやきのやりかた知らないな」

と、お酒をご所望になりました。エプロンがけのお嫁さん姿で、特級の一升びんをかかえていきますと、先生は、それをどくどくっと鍋に入れられ、溢れ出したお汁で電熱器がびっくりしたように、じゃーんと大きな音を立て部屋中がいい匂いでいっぱいになったことを楽しく思い出します。おかげで、おいしい

お肉をたくさんいただきました。主人も子どもも大喜び。そのとき、料理の腕も先生のほうが相当上だと認識。またお料理はまわりの人を幸せにするとわかり、私は発奮して、お料理の本を棚いっぱい集めました。明るく豪快でいろいろ刺激を与えてくださる先生でした。そのころ私はあちこちの大学で教えていたのですが、

「アメリカのこと教えるなら」

と先生は目を光らせて、よくおっしゃいました。

「2年に一度はアメリカに行かないとダメだぞ」

あの国は変化が速いんだ、と。中屋先生はいつまでも奮発させる名人でした。

今から考えると、当時の東大の教養学部は、人間教育と語学教育とを重視した旧一高の伝統と、戦後日本に入ってきた新しいリベラル・アーツ教育の理念—幅広い教養や知の探求、思考力や総合的判断力、異文化にたいする共感、変化に対応する能力、などの育成—がうまく溶け合っていたところのように思われます。私はそれを充分身につけることはできませんでしたが、目に見えないものを見ることの大切さは学んだように思います。

教室外では、私は「音感」というクラブに入り、合唱を楽しみました。私は行ったことはありませんが、当時新宿や渋谷の「うたごえ喫茶」でよく歌われていたという「トロイカ」や「バイカル湖」などを歌ったものです。

「歴研」と呼ばれていた歴史学研究会にも所属し、読書会で、感想などを述べ合いました。当時の歴研メンバーが、何年か前のこと、「文集」を出すということで連絡してこられたとき、

「斎藤さんには、よくやり込められましたよ」

と意外なことをいわれ、困惑してしまいました。

1957年春、東大教養学部アメリカ科を無事卒業し、大学院に進みました。専攻は宗教学。アメリカの宗教思想史をもっと深く勉強したいと思ったからです。駒場と違って、本郷のキャンパスは、雰囲気为重厚で、戸惑うこともありましたが、岸本英夫教授や諸先生方、先輩方に暖かく迎えていただいたことを嬉しく思い出します。

しかしその年の9月、アメリカに留学することになりました。行き先は、念願かなってマサチューセッツ州のスミス・カレッジ。アメリカ科の中屋健一先生には

「ストレート A をとらないと推薦状を書いてやらないぞ」といわれ続けましたが、きっと先生が身に余る推薦状を書いてくださったのでしょう。学費のほか、寮費や食費も支給される奨学金をスミス大学からいただき、渡航費はフルブライトからいただいてニュー・イングランドの地に降り立ったときには、大きな夢がかなえられ、心から感謝しました。

スミス・カレッジのキャンパスは天国のように美しく、女子ばかりで拍子抜けすることもありましたが、学生たちは皆積極的。とりわけ、のちにシカゴ大学に移られたプロフェッサー・マンの授業はインターアクティブ的ではばらしく活発。感激しながら聞きました。その他アメリカの歴史や文化の授業を受けながら、ワシントン・グラドンというソーシャル・ゴスペラーについて論文を書きあげ、1959年6月スミス大学から歴史学の MA をいただき帰国、本郷にもどりました。



(スミス・カレッジ
留学時代[1958年])

落ちつく間もなく、東京農業大学で英会話を教える傍ら、20世紀のアメリカ神学者ラインホルド・ニーバーに関する論文を日本語で書き、1961年3月修士号をいただきました。そしてその翌月、現在の夫、児玉実英と結婚しました。彼はちょうど私がスミスにいたころ、アーモスト大学に、新島奨学金を得て留学中で、英文学を専攻していましたが、ピアノの上手な好感のもてる青年でした。彼はアーモストを出た後、ワシントン州立大学で MA をとり、帰国、同志社女子大学で教え始めていたのです。のち彼が選挙で選ばれて学長になるとは夢にも思わず、彼の伴奏で私はときどき「冬の旅」などを歌っておりました。

65歳で定年を迎えた私は、ずっと気楽になりました。ところが、2006年1月、突然歩けなくなり、18時間に及ぶ手術を受けました。経過は順調で、今は、リハビリに励み、徐々に回復いたしております。でもすっかり年をとった感がいたします。